優秀賞

母の背中

千葉県 千葉県立東葛飾中学校三年　大久保 友葵

私の家には車がない。どこに行くにも徒歩や自転車である。最も大変だったのは幼稚園児の頃だ。家から自転車で四十分ほどの場所にある園に毎日通っていた。過ごしやすい季節ならまだ良いのだが、日差しが強い真夏日等は特に大変である。迎えの時間に顔を真っ赤にして現れる母。仕事場から急いで来てくれたのだろうが、爽やかに車に乗って帰路につく友達が少し羨ましかった。風が吹き荒れる日は母の後ろに隠れるようにぴったりとくっついていた。私が片仮名を覚えた日は背中に書いた文字を当てるゲームをして遊んだ。洗剤の香りがする、大きな、けれど手を伸ばせばすぐそこにある、そんな背中だった。

二年弱当たり前のように送迎してもらっていたある日、母が突然、体調不良で入院した。そして寡黙な父による送迎生活が始まった。スピードが速く爽快だが、何処か物足りない。なぜ私は車送迎でもバス送迎でもないのか。そう尋ねると、父は意外な言葉を放った。

「自転車の後ろに乗れるのは子供の特権だ。毎日ママの姿を見ていて何も感じないのか。」

正直、私は父が何を言っているのかを理解することがあまりできなかった。ただひたすらに他人を羨むだけだった。

それから月日は流れ、私も中学生になって誰かに迎えに来てもらうことはなくなった。何事も一人でやるように。そう言われる日々を過ごしていた。ある時、母から「買い物のしすぎで荷物が重いから自転車で迎えにきてほしい」との連絡がきた。友達に母親と共に歩いている姿を見られたら恥ずかしい、という気持ちもあったが、他にすることも無かったので、急いで待ち合わせ場所へと向かった。すると、そこには何キロもありそうな荷物を両手に抱えた母が嬉しそうに立っていた。けれど、夕食のメニューを語りながら自転車を押す母の背中は、心なしか小さく感じた。背中に文字を書いて遊んでいた時の、あの黒板のように大きな背中ではなくなっていた。

最近は互いに口を開けば喧嘩になり、手を繋いで歩くこともなくなった。スマホばかりを見て、せっかく振られた話題にも適当な受け答えばかりしていた。そんな時、母の背中を見て思い出したのだ。毎日自転車の上で過ごしていた四十分間、私は母と密接に繋がっていた。母に護られていた。一日の出来事を座って好き勝手に喋っていた瞬間は文句を言いつつも、幸せな時間だった。暑い中、寒い中迎えにきてくれてありがとう、と過去の私は一回でも言っていただろうか。今までは「恥ずかしい」と言ってなかなか口に出せなかったが、勇気を出していつか伝えてみようと思う。彼女の背中が私に気付く機会を与えてくれた。「母の背中には助けられてばかりいる」。微かに香る、いつまでも変わらない匂いが私の鼻をついた。